

孟浩然の「坐」と「徒」について

—「臨洞庭上張丞相」詩解釋の試み—

三 枝 秀 子

一、はじめに—「坐」に関する問題—

孟浩然の「臨洞庭上張丞相」詩は彼の代表作の一つとされ、また、岳陽樓を詠じた詩として杜甫の「登岳陽樓」に並ぶ作品と言われている。<sup>(1)</sup>ここにまずその全文を挙げたい。

孟浩然「臨洞庭上張丞相」(洞庭に臨みて張丞相に上る)

八月湖水平 八月湖水平らかに

涵虛混太清 虚を涵して 太清に混ぜず

氣蒸雲夢澤 氣は蒸す 雲夢の澤

波撼岳陽城 波は撼かす 岳陽城

欲濟無舟楫 濟らんと欲するに 舟楫無し

端居恥聖明 端居して聖明に恥づ

坐觀垂釣者 坐ろに釣を垂るる者を觀ては

徒有羨魚情 徒らに魚を羨む情有り

論者は拙論「孟浩然「臨洞庭上張丞相」詩——從來の解釋について——」において、この詩に關する先行研究についてまとめ、さらにこの詩を理解する上での問題點、及び日本と中國・臺灣における解釋の違いを明らかにした。<sup>3)</sup>

日本における研究の多くは、「坐」の訓讀に「そぞろに」をあて、「ふと・なんとなく」の意としている。少數派として、川合康三氏は、「坐」を「坐ながらにして」と訓じて「何もせず空しく」の意とし、さらに、「坐」と「徒」の二句は互文の關係にあるという。<sup>4)</sup>

他方、中國や臺灣においては、「坐」の意味は「徒」と同じく、「白白」や「徒然」(日本語に譯すと「無駄だ」とし、さらに、「坐」の句と、續く「徒」の句とは互文の關係にあるという。<sup>5)</sup>

こうして見ると、川合氏を除く日本での研究の多くは、「坐」と「徒」の句が互文になっていることへの認識が薄かった。そして中國・臺灣(及び川合氏)では、「坐」と「徒」の句を互文としているが、それ以上の詳細な検討については述べていないことが明らかになった。

「坐」と「徒」を使用することにより、何が如何に表現されているのか。さらにこの「坐」と「徒」の表現は孟浩然詩にだけ使用される例なのか等、この表現に關して検討する必要があると論者は考える。よって、本稿において、孟浩然以外の詩人の詠んだ「坐」と「徒」の用例と、孟浩然の「坐」と「徒」とを比較し、孟浩然の獨自性について見てみたい。

検討の対象とするのは、六朝から唐代までの「坐」と「徒」の用例である。また、「徒」を「空」に作るテキストもあることから、「坐」と「空」の用例についても検討することにした。この「坐」と「徒」あるいは「空」との對句にはどのような感情が表現されているのか。それはどのような事物から引き起こされたのだろうか。そして孟浩然の用例と何らかの違いがあるのだろうか。これらについて以下に検討を行っていく。

## II、六朝期—閨怨と客思—

まず、六朝期の「坐」と「徒・空」の用例を見ていくことにする。

「坐」の語が、「徒」または「空」と對の形にて詠まれている例は、六朝時代の謝朓（四六四～四九九）、王融（四六七～四九三）の作品に一例ずつ、そして江淹（四四四～五〇五）の作品に二例見える。この章ではそれらの用例に関する中國と日本それぞれの解釋についても比較しながら検討していきたい。

まず、謝朓の「和王主簿怨情」詩から見ていきたい。

謝朓「和王主簿怨情」（王主簿の怨情に和す）

掖庭<sup>えいてい</sup>聘<sup>へい</sup>絕國　掖庭<sup>えいてい</sup>より絕國に聘せられ

長門失歡宴　長門にて歡宴を失す

相逢<sup>ふそう</sup>詠<sup>ぎ</sup>麋<sup>び</sup>蕪<sup>わ</sup>　相逢ひて麋蕪を詠じ

辭<sup>ことば</sup>寵<sup>ちゆう</sup>悲<sup>ひ</sup>班<sup>はん</sup>扇<sup>せん</sup>　寵を辭して班扇を悲しむ

花叢亂數蝶

花叢には數蝶亂れ

風簾入雙燕

風簾に雙燕入る

徒使春帶除

徒しく春帶を除なかしめ

坐惜紅粧變

坐なしく紅粧の變ずるを惜しむ

生平一顧重

生平には一顧重く

宿昔千金賤

宿昔には千金賤し

故人心尙爾

故人の心尙ほ爾りや

故人心不見

故人の心見えず (全文)

この詩は『文選』卷三十及び『玉臺新詠』卷四に採られている。詩題の「王主簿」は『六臣注文選』注に、名は「季哲」とある。花房英樹氏によると彼の詠んだ詩は現在傳わっていないとのことである。詩の大意を以下に示したい。

第一句から第四句には、まず宮殿から遠く離れた未開の土地に行った王昭君が詠まれ、次に武帝の寵愛を失い楽しい宴に侍ることもなくなった陳皇后が、そして次に山に藥草を採りに登り山から下りると偶然元の夫に再會した妻が、最後に君の寵愛を奪われ秋の団扇うちわのように斥けられた班婕妤が詠まれている。續く第五句から末句には、詩中の主體の閨怨の情が詠まれている。花の咲き亂れる草むらに蝶が飛び交い、部屋のカートのンの中につがいの燕が飛び込む。むなしくも春の服の帯が長くなるほどにやせ細り、美貌が衰えていくのを一人惜しんでいる。若い頃あなたは私を振り向かせようとして、千金を拂っても安いと言っていた。あなたの心は今も變わっていないのでしょうか、あなたの氣持ちがわからない。

このように第一句から第四句のそれぞれの句に不遇な身の上の女性たちが詠まれている。そして第五句から最終句において、詩中の主體が一人寂しい状態である様子と閨怨の情が詠まれるという構成になっている。問題とする「徒」は第七句に、「坐」は第八句に詠まれている。この「和王王簿怨情」詩は、趙桂藩氏『孟浩然集注』の「臨洞庭（上張丞相）」詩の注に、「徒」、「坐」互文同義の例として引かれている。<sup>(1)</sup>この「互文同義」について理解することは、孟浩然の「臨洞庭上張丞相」詩の理解の手がかりに成り得ると考える。よって以下に論者の理解を示していくことにする。

第七句の「徒使春帶暎」の「帯が長くなる」とは、女性が痩せて帯が長くなってしまったことを用いて容姿の衰えを表現している。第八句の「坐惜紅粧變」の「紅粧が變わる」とは、女性に施された化粧が時間の経過とともに崩れることに託して、女性の容貌の衰えを表している。「徒」と「坐」が詠まれるこの兩句は、共に、女性の美しい容貌が時間と共に衰えていくのに爲す術もなく、ただ時の過ぎゆくままにいただけであることを「春帶」と「紅粧」に託して表現している。つまり、二句において表現されている内容は、女性の容姿の衰える様子である。それを直接的に表現せず、「徒」と「坐」のそれぞれの句に、「帯が長くなる」と「化粧の崩れ」と婉曲的に表現しているのである。互文とは、二句の中の言葉の意味や、句の内容をそれぞれ補い合う関係にある對句構造のことである。よって、「帯が長くなる」と「化粧の崩れ」は内容的に同様のことであるため、「化粧の崩れ」を先に詠み、次に「帯が長くなる」としても、表現されている内容は變わらない。また、「徒」と「坐」も同じ意味として考えられるため、入れ替わっても内容は同じということになる。

このような對句構造は、次の、王融の「古意二首」その一にも見ることができ。

王融「古意二首」その一（本稿では便宜上、以下「古意」と示す）

遊禽暮知反 遊禽は暮れに反るを知るも

行人獨不歸 行人は獨り歸らず

坐銷芳草氣 坐しく芳草の氣を銷し

空度明月輝 空しく明月の輝を度る

嘔容人朝鏡 嘔容ひんよう 朝鏡に入り

思淚點春衣 思淚 春衣を點ず

巫山彩雲沒 巫山に彩雲沒し

淇上綠條稀 淇上に綠條稀なり

待君竟不至 君を待つも竟に至らず

秋雁雙雙飛 秋雁雙雙として飛ぶ (全文)

この詩は『玉臺新詠』卷四に採られている作品である。

詩の大意は、空を飛ぶ鳥は夕暮れには罫に必ず歸ってくるものであるのに、遠くに出かけたあの人は歸ってこない。

あの人を待つ私は、春の芳しい草の生き生きとした氣がすでに消え失せ、月が美しく輝く時もすでに過ぎてしまったのと同じような状態になっている。朝、鏡に皺がうつり、涙が春の衣に滴り落ちる。巫山の彩雲も消え、淇水の緑の枝がもう少なくなってきた。私はあなたを待っているのにあなたは歸って來ない。秋の雁でさえ二羽が連れだつて飛んでいるのに、というものである。

第七句の「巫山彩雲沒」には、『楚辭』「高唐賦」の楚の懷王と巫山の神女とが夢の中で出會い、そして別れるという

話が背後にある。巫山の神女は懷王と別れる際に「朝は雲になり、夕は雨となってお側にいます」（旦爲朝雲、暮爲行雨）」と言っていた。その「雲」が無（没）くなっている状態とは、戀しい人と離れ離れの状態にあると想像できる。

第八句の「淇上綠條稀」に詠まれる「淇上」は、『詩經』「鄘風・桑中」に、「我を淇ほとりの上ほとりに送る（送我乎淇之上矣）」とある。戀人と逢瀬をし、淇水のほとりで別れるという典故が背景にある。よって、生い茂っていた緑の枝がまばらになるとは、戀人同士が、今は逢うことも無くなったことを表現していると解する。

このように「古意」詩は、冒頭から一貫して詩中の主體が、愛しい人の歸りを待っていることが詠まれている。そして詩中に前述の二つの典故を用い、詩中の主體が愛しい人と離れ離れになっている状態であることを際立たせている。これらからこの詩は一人寂しく愛しい人の歸りを待つ「閨怨詩」と理解することができる。

そして、「坐」は第三句の「坐銷芳草氣」に、「空」は第四句に「空度明月輝」と詠まれている。この「坐」と「空」の語、及び内容について『漢魏六朝詩鑑賞辭典』にて陳慶元氏は次のように述べている。

春草碧色、明月如玉、時光美好如此、却在不斷的期待中白白流逝；青春也像芳草明月一樣美好、也同樣在不斷的期待中空度。「坐」、亦「空」義。芳草銷歇、空等了一個春季、然而行人終于未歸。

春のみどりの草や、秋の玉のように輝く明月、時節はこんなにも美しい。それなのに、期待して待ち望む間にこの良い時節は無駄にも流れ去ってゆく。同じように若い時もこの芳しい草や輝く月のように美しいものである。そして同じように期待して待ち望む間に無駄にも過ぎていく。「坐」はまた「空」の意である。芳しい草が消えていく、この春、あなたをむなしく待ったものの、遠くに行っただけあなたはまだ戻ってこない。

陳慶元氏は、「坐」を「空」と同義とし、その意味を「白白流逝（無駄に過ぎていく）」「空等了（むなしく待つ）」としている。また、この二句の、「芳草」と「明月」を「青春」の喩えと解していることから、氏は「互文」と明言していないが、この二句を「互文」として理解していると見受けられる。

このように王融詩に見られる「坐」と「空」の用例も、先の謝朓詩の「坐」と「徒」の例と同様に、詩中の主體が思う人を何もせずにとだ待つという聞怨の情と共に詠まれている。そして、この「坐」と「空」の詠まれる句も互文と見なし得るのである。

ここで、謝朓詩と王融詩に詠まれていた「坐」と「徒・空」についてまとめたい。まず、「坐」と「徒・空」は對句の中に用いられている。そして「坐」と「徒・空」は共に同じ意味とされ、その意味は「白白」や「空」、つまり「無駄」というものである。さらに趙氏の注及び陳氏の詩の理解から、「坐」と「徒・空」の句を「互文同義」と見なし得ることも確認した。

中國においてはこのように理解されているが、日本においてはこれと異なる理解がされている。日本においては如何に理解されているのか、次に見ていくことにしたい。比較の便宜上、「坐」に關する解釋には、線、「徒・空」には線を付した。

まず、謝朓「和王主簿怨情」詩の「徒使春帶餘 坐惜紅粧變」は、鈴木虎雄氏『玉臺新詠集』では、「瘦せて春しめる帯はいたづらに長すぎる様になり、そぞろに紅のかほのかはつてゆくのが惜しまれる」と譯している。<sup>13</sup>内田泉之助氏の『玉臺新詠』でも、「春の帯もいたづらに長すぎるありさま、そぞろに紅の顔もふけてゆくのが惜しまれる」と、<sup>14</sup>兩氏共に、「徒」を「いたづら」と、「坐」を「そぞろ」と譯している。因みに、兩氏ともに「徒」を「いたづら」と訓じ、「坐」を「そぞろに」と訓じている。

次に、王融「古意」詩の「坐銷芳草氣 空度明月輝」は、鈴木氏『玉臺新詠集』では、「わたしは春はいたづらに芳草の氣をなくさせてしまひ、秋は空しく明月の輝くのをみすごしてゐる」と、鈴木氏は「坐」を「いたづらに」と解している。この「いたづらに」を、「無益であるさま。むだ」の意と見るならば、中國語での「白白」の意と同様の意としていると見なすことができる。そして内田氏『玉臺新詠』では、「留守居のわたしは春の若草の香りもいつとはなしに消え失わせ、また秋の明月の光も空しく見すごしている」と譯している。因みに兩氏とも「坐」を「そぞろに」と訓じ、「空」を「むなしく」と訓じている。

以上のように鈴木氏と内田氏のそれぞれの解釋を見たところ、「坐」と「徒・空」の言葉の譯について特に注意を拂っているように見られない。陳氏が「明月」と「芳草」とを共に青春の喩えとしていたが、鈴木氏は「明月の輝くのをみすごしてゐる」と解していることから、「互文」という觀點からこの句を解釋していないと論者は理解している。

上記のように、日本においてはこの「坐」および「徒・空」についての意味や用法に特に注意がなされているように見受けられない。また、「坐」と「徒・空」の句とが「互文」であるという認識もなされていないように見受けられる。これは何が原因しているのだろうか。おそらく、「坐」を「そぞろ」と訓讀することに甘んじ、それ以上の解釋をしようとはしなかったことに一因があると推測する。

謝・王詩に見える「坐」「徒・空」の句は、詩の中の主體の閨怨の情が表現されていたが、次の江淹の「望荊山」詩に見える「坐」と「空」には、待たせる男性側の客思が表現されている。

#### 江淹「望荊山」(荊山を望む)

奉義至江漢 義を奉じて江漢に至り

始知楚塞長 始めて楚塞の長きを知る

南關繞桐柏 南關には桐柏繞り

西嶽出魯陽 西嶽には魯陽出づ

寒郊無留影 寒郊には留影無く

秋日懸清光 秋日は清光を懸く

悲風繞重林 悲風は重林を繞げ

雲霞肅川漲 雲霞は川漲に肅し

歲晏君如何 歳の晏るるを君は如何す

零淚沾衣裳 零淚して衣裳を沾す

玉柱空掩露 玉柱は空しく露に掩はれ

金樽坐含霜 金樽も坐しく霜を含む

一聞苦寒奏 一たび苦寒の奏せらるるを聞けば

更使豔歌傷 更に豔歌をして傷ましむ (全文)

李善注『文選』によると、江淹が劉景素に従って荊州にいた頃この作品が作られたという。李善注及び五臣注『文選』と鮑紹初・張亞新兩氏の『江淹集校注』によると、この詩を以下のように解することができる。

この詩の第一句から第八句には、荊州に流れる長江と漢水の流れ（江漢）や、荊山の險しさ（楚塞）、この地にある「桐柏」や「魯陽」の山々の様子が詠まれ、續く第九句と第十句「歲晏君如何、零淚沾衣裳」は、李善注に「古詩十九

首・その十九」の「涙下沾裳衣（涙下りて裳衣沾す）」が典故となつてゐるとある。この「古詩十九首・その十九」の「涙下沾裳衣（涙下りて裳衣沾す）」は、夫と離れ一人眠れずに涙を流し夜を過ごす妻の閨怨の情を表現するものである。だが、この江淹「望荆山」詩の「歲晏君如何、零淚沾衣裳」は、年が暮れるのに「君」はどうするのだ。涙を流して衣を濡らすばかりであると詠まれてゐる。この「君」とは江淹自身のことであり、自問する文脈の中に詠まれてゐる。よつて、ここでは江淹自身の羈旅の憂いと理解し得る。

そして第十一・十二句「玉柱空掩露、金樽坐含霜」に詠まれる「空」と「坐」について、兪紹初・張亞新兩氏は、「徒」を「坐」と同じ「徒然」の意としてゐる。<sup>20</sup>この「徒然」とは日本語に譯すと、「むだに」の意である。「徒然」を「むだに」の意とすると、この第十一・十二句は、豪華な宴席の中にあり、琴（玉柱）<sup>21</sup>が「むだに」露に覆われ、酒樽（金樽）にも「むだに」霜が降つてゐる状態であるという意と解すことができる。これは、琴や酒樽に露や霜が降りるほどの長い時間の描寫であり、また、霜や露が降りれば降りるほど、旅愁が募つていく様の描寫と解すことができる。そして最後の一聯に至り、「苦寒」行を耳にすると、旅の辛さと、「豔歌」の思いが一層募つていく。この様な文脈として理解し得よう。

この詩の末句の「一たび苦寒の奏せらるるを聞けば、載ち豔歌をして傷ましむ」の「苦寒」と「豔歌」について、李注及び、兪紹初・張亞新兩氏によると、「苦寒」は、曹操の「苦寒行（北上篇）」、「豔歌」は、「羅敷豔歌行」のこととある。前者は行役の辛さが詠まれた作品であり、後者は別名「陌上桑」または「日出東南隅行」とも言われ、その内容は、王仁の妻である羅敷が、他の男性からの誘惑を拒んだものである。<sup>22</sup>

江淹はこの詩が詠まれた時異郷に居り、そこで催された宴席にて「苦寒行」を聞き旅の辛さに共感する。そしてさらにそこで「豔歌」を聞き、郷里のことを思うのである。その郷里にはおそらく「妻」が居て、その妻はまさに今閨怨の

状態にあり、江淹は閨怨の状態にある妻を思いつつ、他郷に居る旅愁をより一層募らせていったのであろう。

先の王融および謝朓の詩に詠まれた「坐」と「徒・空」の語は、閨怨の状態である女性側の心情を表現していた。一方、江淹の「望荆山」詩では、「豔歌」の語により、女性を閨怨の状態にしていることを詠みつつ、さらにそこには男性側の旅の辛さや故郷を思う情も詠んでいる。その旅愁が「空」と「坐」の句に、宴の席にて露に琴が濡れ、霜が降り樽が白くなっていくのをただ寂しくむなしく見ていることが表現されていると解し得る。江淹にはもう一首「遷陽亭」詩に「空」と「坐」の例がある。これも他郷に身を置く客思が詠まれているがここでは割愛する<sup>(23)</sup>。

六朝期の詩における、「坐」と「空・徒」とが對の體をなして詠まれる場合、謝朓と王融詩の例では、閨怨詩の女性の立場の過ぎゆく時間が表現されていた。そして江淹の「望荆山」詩は、他郷に居る男性の側の客思が詠まれていた。詩の中の主體の性別は、女性・男性と異なっている。だが、いずれも主體は何もせず、時間だけが過ぎていく状態にある點は共通している。これらの例から、この時期には、「坐」と「徒・空」を對に詠むことにより、閨怨と客思とを表現していると解した<sup>(24)</sup>。それでは次に初唐期の用例を見ていきたい。

### III、初唐期—閨怨と客思から隱遁を求める思いへ—<sup>(25)</sup>

まず、盧照鄰(六三七?—六八〇?)の「于時春也 慨然有江湖之思 寄此贈柳九隴」詩を見ていきたい。

盧照鄰 「于時春也 慨然有江湖之思 寄此贈柳九隴」

(時春において 慨然たる江湖の思有りて 此を寄せて柳九隴に贈る)

形骸寄文墨

形骸は文墨に寄すも

意氣託神仙

意氣は神仙に託す

我有壺中要

我に壺中の要有り

題爲物外篇

題して物外の篇と爲す

將以貽好道

將に以て好道を貽し

道遠莫致旃

道遠きも 旃ちれを致す莫し

相思勞日夜

相思ふも 日夜に勞し

相望阻風煙

相望むも 風煙はに阻はまる

坐惜春華晚

坐ましく春華はの晩なるるを惜しみ

徒令客思懸

徒なしく客思を懸なけしむ (部分)

李雲逸氏の『盧照鄰集校注』によるとこの詩は、咸亨元年(六七〇)の晩春に蜀において詠まれたものとされる。

全三十六句からなる詩である。ここに引用した部分は第十一句から第二十句までである。第十一・十二句に「形骸寄文墨、意氣託神仙(形骸は文墨に寄すも 意氣は神仙に託す)」とあるように、隱遁生活に憧れを抱きつつも、その身を仕事に捧げていると詠まれ、そして、第十九・二十句の「坐惜春華晚、徒令客思懸(坐しく春華の晩るるを惜しみ、徒しく客思を懸けしむ)」に「坐」と「徒」とが詠まれている。

この第十九句「坐惜春華晚」に詠まれる「春華」は、祝尚書氏の『盧照鄰集箋注』に、蘇武(前一四〇?~前六〇)の「古詩四首」の「努力愛春華、莫忘歡樂時(努力して春華を愛し、歡樂の時を忘るる莫かれ)」の句が典故にあると

いう。<sup>(27)</sup>この「春華」は女性の美しい容貌を意味する言葉である。夫が旅立ち際に妻に向かって、いつまでも若く美しくいてくれよ、という。これを踏まえて「坐惜春華晚」句を解すと、残された女性は「春華」（女性の美しい容貌）を失いつつある状態にあるということになる。そして續く第二十句「徒令客思懸」には、遠くの他郷に居る人は故郷を思い心配することしかできない状態にあることが詠われている。

先の六朝期の「坐」と「空・徒」の例では、詩中の主體（女性側）の閨怨の情か、あるいは詩中の主體（男性側）の他郷に身を置く客思とが主題となり、それぞれの詩に表現されていた。この「于時春也 慨然有江湖之思 寄此贈柳九隴」詩では、第十九句には閨怨が、そして第二十句には客思がそれぞれ「春華」「客思」の文字により詠み込まれている。一つの對句の中にこの二つの情を詠み込むことは、先の六朝詩の例には見えなかった。この「于時春也 慨然有江湖之思 寄此贈柳九隴」詩ではそれが爲されている。これがこの詩の一つの特徴として見ることができるといえる。そしてさらにこれ以上に注目すべきことは、第十九句・第二十句の對句の中に閨怨と客思を詠みつつも、詩全體において表現されているのは、隱遁を望むも仕官するしかなく、何もせず時に時が過ぎていくことが表現されていることである。

この盧照鄰詩と同じように、次の陳子昂（六六一―七〇二）の「題居延古城贈喬十二知之」詩も隱遁への憧れを抱きつつも何もせず時が過ぎていくことが表現されている。

陳子昂「題居延古城贈喬十二知之」（居延古城に題し喬十二知之に贈る）

聞君東山意 聞く君 東山の意を

宿習紫芝榮 宿習す 紫芝の榮

滄洲今何在 滄洲 今何くにか在る

華髮旅邊城 華髮 邊城に旅す

還漢功既薄 漢に還るに 功既に薄く

逐胡策未行 逐うく胡の策 未だ行はれず

徒嗟白日暮 徒ただしく白日の暮るるを嗟なげき

坐對黃雲生 坐ひましく黃雲の生ずるに對す

桂枝芳欲晚 桂枝の芳 晩に欲せしも

意以誘誰明 意よ以の誘 誰か明かにせん

無爲空自老 爲す無かれ 空しく自ら老い

含歎負平生 歎を含んで平生に負くを (全文)

この詩は、彭慶生氏『陳子昂集校注』に、「垂拱二年（六八六）北征途中」に作られたとある。また、中尾一成氏の論考「垂拱二年出征考」（五）においても同年の作とし、さらに邊境へ赴いた經緯及びこの時期に制作された陳子昂の詩文の特色など詳細な検討がなされている。中尾氏によると、「題居延古城贈喬十二知之」詩を含むこの時期の陳子昂の作品は、「喬知之の不遇に對して同情を示すとともに、喬知之を苦境に追いやった朝廷に批判の眼差しを向けている」ものであるという。次にこの詩の大凡の解釋を示したい。

君は東山の意を知っている。日頃から隱遁を望んでいるが、滄洲のような隱遁すべき所は今どこにあるのか。白髮頭になった今も君は都から遠く離れた所において、都に歸ろうにも大きな手柄を立てていないし、胡を追い拂う策も未だ行っていない。君は何もせずむなしく日が暮れるのをなげき、砂が舞い上がるのを見ているばかりである。手柄を立てる

には時すでに遅く、たとえ手柄を立てても後漢の馬援が受けた誇りを、誰が辨明してくれるのか。このまま何もせず  
老い、嘆きながら自分の氣持ちに背く日々を送ってはならない。

「徒」と「坐」は、第七・八句に見える。「坐」について、彭慶生氏は張相の『詩詞曲語辭匯釋』卷四、「坐、猶徒也、  
空也、枉也」を注に引用している。<sup>⑧</sup>これによると「坐」を「徒」と同義とし、ともに「むだに」の意として解している  
ことがわかる。よって、「徒嗟白日暮、坐對黃雲生（徒しく白日の暮るるを嗟き、坐しく黃雲の生ずるに對す）」の二句  
は、日が暮れ「黃雲」が生じるのをただ見ているだけの日々を送っているという意と解し得る。

この詩は邊境の地にいる喬知之の身を案じ、その思いを陳子昂が詩に詠んだものである。故に「徒嗟白日暮、坐對黃  
雲生」に詠まれる「徒」と「坐」は、喬知之が他郷に身を置き、その状態のまま何もせず無駄に時を過ごしているの  
だろうと陳子昂が詠んでいるということになる。

「何もせずに無駄な時を過ぐす」というのは、先に見た六朝の謝・王詩の閨怨、江淹詩の客思とに表現されていたの  
と同じ状態である。兩者共に望んでいない状態であっても何もせずそのままの状態なのである。

次の陳子昂の「送殷大入蜀」詩に、「坐」と「惟」の語の例が見える。この例にも「何もせずに無駄に時を過ぐす」  
という状態が表現されている。この例は、「徒」ではなく「惟」による對句であるが、用法の一つとして見ておきたい。  
ここでは殷大の姿が見えなくなるまで何もせずただ見送っていることが「坐」と「惟」により表現されている。

陳子昂「送殷大入蜀」（殷大蜀に入るを送る）

禹山金碧路 禹山 金碧の路

此地饒英靈 此地 英靈饒る

送君一爲別 君を送りて一たび別れを爲さば

悽斷故鄉情 悽斷たり故郷の情

片雲生極浦 片雲 極浦に生じ

斜日隱離亭 斜日 離亭に隱る

坐看征騎沒 坐だ征騎の沒するを看

惟見遠山青 惟だ遠山の青きを見る (全文)

彭慶生氏によると、「殷大」という人物は未詳である。氏はこの「坐」についても『詩詞曲語辭匯釋』卷四、「坐、猶徒也、空也」を引用している。よって、この「坐」も「徒」や「空」と同義として見ることができ、また「坐」と「惟」<sup>②</sup>とが對に用いられていることから、「惟」も同義と見なすことができると考えられる。

「坐」と「惟」の詠まれる兩句の内容は、殷大の姿が見えなくなるまで見送り、姿が見えなくなっても、まだそこに佇み、遠くのみ山だけを見ている、というものである。何もせずただ時間だけが過ぎていくことがここに表現されていると見て取れよう。

先の「題居延古城贈喬十二知之」詩では、隱遁を望むもそれが出來ずにいる状態が、そして、この「送殷大入蜀」詩では「殷大」が居ないという状態にあることが表現されている。それぞれ表現されている内容は異なるが、自身が望んではない状態であるという點において共通している。

ここで、初唐期の「坐」と「徒・空」の對句表現についてまとめたい。まず、盧照鄰の「于時春也 慨然有江湖之思 寄此贈柳九隴」詩は、閨怨と異郷に身を置く客思とが、對句となって表現されているが、詩全體において表現されてい

るのは、「閨怨」や「客思」ではなく、隱遁を望むも仕官を續けるしかなく、その状態のまま時が過ぎていくことであつた。また、陳子昂の「題居延古城贈喬十二知之」詩も、喬知之が隱遁を望むもそれが出來ずにいる状態である様子が表現されていることを確認した。

これまで六朝詩及び初唐の詩に詠まれる「坐」と「徒・空」の對句表現を検討した。六朝詩では、思う人と離ればなれになつた閨怨の情、もしくは客思がそこに詠まれていた。女性側、男性側とそれぞれ主體は異なるが、何もせず、時間だけがただ過ぎていくという状態は共通していた。初唐では、男性側の客思が詠われ、さらに仕官を辭めて隱遁したいがそれもできずにただ時間が過ぎていくことが表現されていることが認められた。

これらは一見、異なる内容を表現しているのであるが、共通點が見られた。それは、過ぎゆく時間の中、自身の望む状態にいないことである。だが、望む状態ではないからといって、自身の望む状態になるように行動するわけではない。このような状態の中であつて、時の過ぎゆくままに何もせずただそこに居るのである。この状態を「坐」と「徒・空」の對句にて表現していると解している。

これを踏まえて、最後に孟浩然の「臨洞庭上張丞相」詩について検討したい。

#### IV、孟浩然「臨洞庭上張丞相」——隱遁から仕官へ——

「臨洞庭上張丞相」詩の第一句から第四句までの前半部分には、洞庭湖の雄大な風景が詠まれ、そして、第五・六句に「欲濟無舟楫，端居恥聖明」と、政界に出ようにもその手立てもなく、隱遁している状態であることを恥じていると詠う。そして續く第七・八句にて「坐」と「徒」の對句表現を用い、「坐觀垂釣者，徒有羨魚情」と詠む。前章にて見

てきた例のように、この「坐」と「徒」により、自身の望まぬ状態が表現されていると解すならば、隠遁しているこの状態に満足していないことになる。そしてその状態で、釣りをしている人（≡仕官を願う人）を見ると、無駄にまた魚を羨む（≡仕官を求める）気持ちがある、ということになる。

先の盧照鄰詩においては隠遁を望む情が、また陳子昂詩では、他郷に身を置く喬知之が本意な状態にあり、隠遁することもできずただ時が過ぎていくことが「坐」と「徒」により表現されていた。兩詩共に、仕官している者が隠遁を願うもそれを果たせずにいる状態にあった。だが、孟浩然のこの詩では、仕官しておらず隠遁している状態にある。よって隠遁している状態に満足していないとして解すことができる。

拙論「孟浩然「臨洞庭上張丞相」詩―従來の解釋について―」においてすでに述べたが、日本においてこの詩は、前半に比べて後半があまり評價されてはこなかった。その原因は、前半部にて表現される壮大な自然描寫に比べ、後半は自分を取り立てて欲しいという願いが表現されているため、「隠遁者孟浩然」らしからぬ「むき出しの感」や、「みみっちなさ」があり、詩の味わいが損ねられるという理由からであろうと考えられる。これに對して川合氏は、

雄大な洞庭湖を描く前半から、洞庭湖―渡りたい―舟がないと語り繼いで援引を求める後半につながる。山水を描くに長じた無官の詩人とはいえ、孟浩然是終始して官を求め續けたのであって、その兩面がこの詩には集約されている。<sup>(33)</sup>

という。氏が言う「兩面」とは、孟浩然の山水詩人の面と、仕官を求める面である。

川合氏の言う「兩面」性には賛同するが、それを孟浩然が求めていたのかどうかは別にして、この詩の表現方法に注

目してこの詩の理解を試みたい。この詩は「坐」と「徒」を用いて互文をなし、従来のように望まぬ状態でもせざる過ぎゆく時間を表現している。そしてそこに表現されている「望まぬ状態」は、盧照鄰詩、陳子昂詩においては「仕官している状態」であったのに對し、孟浩然のこの詩ではその反對の「隱遁している状態」にある。つまり、盧照鄰詩、陳子昂詩とは異なる方向の、仕官を望むことが表現されていると見て取れるのである。盧照鄰詩、陳子昂詩の例とは異なる方向であるからと言って、このような結論を出すのは性急であることは承知しているが、これをこの詩の獨自性として論者は考えている。

## V、おわりに

以上、「坐」と「徒・空」が對句にて詠まれる場合のその表現内容について、六朝から唐代の孟浩然詩まで検討した。それによると、六朝期の王融と謝朓詩では、女性側の閨怨の情が表現されていた。江淹詩では男性側の客思が表現されていた。そして、初唐の盧照鄰詩は、閨怨と異郷に身を置く客思とが、ちょうど對句となって表現され、詩全體においては、隱遁を望むも仕官するしもなく、何もせずに時が過ぎていくことが表現されていた。さらに、陳子昂の「題居延古城贈喬十二知之」詩でも、隱遁を望むもそれが出來ずにいる状態であることが表現されていた。

これらの詩は、閨怨、客思、隱遁を望む、と一見異なることを表現しているように見えるがそうではない。閨怨と客思は共に愛しい人と離れ離れになっている状態である。そして異郷に身を置き、客思が募る状態であっても隱遁できずにいる。それぞれ自身の望む状態ではなく、その状態のままどうすることもできずに、時が過ぎて行くだけの状態であることは共通している。これを踏まえると、孟浩然の「臨洞庭上張丞相」詩の後半部分、洞庭湖を渡りたいのに舟がな

く渡ることができないとは、仕官を志すもその願いを叶えてくれる人物が居ないため、どうすることもできずにその状態にいます。それをここに表現していると思われることができます。

よってこの二句の「坐」と「徒」には「ただ」または「むなしく」の訓を當て、「むだにも」という意にて理解することが妥當と考える。どうすることもできず、むなしくも（むだにも）仕官を求めるだけの状態にあることを表現していると解す。

廬照鄰、陳子昂詩では仕官している状態を不本意な状態としていたが、孟浩然詩では隠遁している状態を不本意とする。このことを認識した上で孟浩然はこの作品を詠んだのかどうかわからない。だが、このように理解するならば、表現者としての孟浩然の一面を見ることができるとはならないか。また、前半には負けないほどの表現として、この後半部の「坐」と「徒」の句を大いに評價し得ると考える。

注

(1) 黒川洋一氏「孟浩然『望洞庭湖、贈張丞相』詩について」（櫻美林大學『中國文學論叢』第七號、一九七九年、一四五頁）に「盛唐の詩人、孟浩然の詩の今日に傳わるものは、古體、今體合わせて二百七十首餘りを數えるが、そのなかでもとくに名高いものは、五言絶句の「春曉」と、五言律詩の「望洞庭湖、贈張丞相」（洞庭湖を望み、張丞相に贈る）との二つの詩である」とある。また、前野直彬・石川忠久兩氏『漢詩の解釋と鑑賞事典』（旺文社、一九七九年初版、一九八〇年重版、九四頁）にも、「洞庭湖畔の岳陽樓からの風光は天下の絶景とされ、古來多くの詩人が詩材にしている。この詩は、杜甫の「岳陽樓に登る」と並ぶ傑作といわれる」とある。さらに田部井文雄氏『唐詩三百首詳解』（上）（大修館書店、一九八八年、四三頁）にも同様の記載がある。

(2) 孟浩然「臨洞庭上張丞相」詩の研究の一つとして、田部井文雄氏『唐詩三百首詳解』（上）（前掲書、四一～四三頁）の書き下し文を引用した。



- (13) 鈴木虎雄『玉臺新詠集』中、岩波書店、一九五五年初版・一九九四年六刷、九一〜九三頁。
- (14) 内田泉之助『玉臺新詠』上、明治書店、一九七四年、二八四〜二八五頁。
- (15) 鈴木虎雄『玉臺新詠集』中、前掲書、八二〜八三頁。
- (16) 内田泉之助『玉臺新詠』上、前掲書、二七八〜二七九頁。
- (17) 『文選』卷二十七「沈約宋書曰、建平王景素、爲右將軍荊州刺史、江淹授景素五經」とある。
- (18) 兪紹初・張亞新『江淹集校注』一九九四年、中州古籍出版社、八頁〜九頁。
- (19) 「君」を江淹の自稱としたのは、兪紹初・張亞新『江淹集校注』(前掲書、九頁)に「君：江淹自稱」とあるによった。
- (20) 兪紹初・張亞新『江淹集校注』(前掲書、八〜九頁)に「坐：空、徒然」また、陶文鵬『漢魏六朝詩鑑賞辭典』(前掲書、九三二頁)にも、「空、坐二字同義、都是「徒然」的意思」とある。
- (21) 「玉柱」とは『六臣注文選』卷一七に「良曰玉柱王徽琴也」、また兪紹初・張亞新『江淹集校注』(前掲書、九頁)にも「柱：琴箏等樂器的弦柱。此代指琴」とある。
- (22) 李注『文選』卷二十七に、「沈約宋書曰、北上苦寒行、魏帝辭。又曰、羅敷豔歌行、古辭也」とある。また、兪紹初・張亞新『江淹集校注』(前掲書、九頁)にも、「苦寒、豔歌：即「苦寒行」和「豔歌行」、皆古曲名。屬樂府相和歌、曹操作有「苦寒行」、或稱「北上篇」、備言冰雪溪谷之苦」(『樂府詩集』卷三三)。「豔歌行」据『樂府詩集』卷三九所載、多寫夫婦傷別之情」とある。なお「日出東南隅行」は『玉臺新詠』卷一に見ることができ。
- (23) 江淹にはさらにもう一例「坐」「空」の對句表現を用いた「遷陽亭」詩がある。これも旅愁を詠じた詩である。  
 桂枝空命折 桂枝空しく命を折り  
 煙氣坐自驚 煙氣坐しく自ら驚く(部分)
- (24) 兪紹初・張亞新『江淹集校注』(前掲書、五〇〜五一頁)によると、この詩は江淹が初めて吳興縣の縣境に入った際に詠まれたものとされる。この作品は吳の地にある武夷山の色彩豊かな山水美と厳しい行程を行く様が詠まれている。  
 注七に示したが、六朝期における「坐」と「徒・空」の用例は調査したところ五例確認できた。ここではその内四例を挙げた。  
 残る一例は、鮑照(四一二頃〜四六六頃)の「古辭」である。

容華不待年 何爲客遊梁 容華年を待たざるに 何爲ぞ客梁に遊ぶ  
 九月寒陰合 悲風斷君腸 九月寒陰合し 悲風君が腸を斷たしむ

歎息空、房婦 幽思坐、自傷 歎息す空房の婦 幽思、坐しく自ら傷む

勞心結遠路 惆悵獨未央 勞心 遠路に結び 惆悵して 獨り未だ決まらず

五・六句に「空」と「坐」が詠まれている。「空」は「坐」と對になっているかのようだが、「空」は「房」と熟語になり「誰もいない部屋」の意、つまり「カラ」の意となっている。この詩の内容も、空房を一人守る女性の悲しみ、「閨怨詩」である。

(25)

唐代の「坐」の用例調査には、インターネット検索サイト「寒泉」及び『全唐詩』（凱希メディアアサービス）を使用した。「坐」に纏わる用例は、孟浩然の當該詩以外に十八例認められた。その内譯は、「徒」と併用二例、「惟」と併用二例、「空」と併用八例である。それぞれの作者と用例數（算用數字）を次に示すと、

\* 坐・徒 盧照鄰 1（本稿にて検討）・陳子昂 1（本稿にて検討）

\* 惟・坐 陳子昂 1（本稿にて検討）・韋應物 1

\* 唯・坐 韋應物 1・張祐 1・許渾 1・李賀 1・羅鄴 1

\* 只・坐 方干 1

\* 坐・空 寒山 1・孟浩然 1・李白 2・杜甫 1・韋應物 1・貫休 1・齊己 1

となる。本稿にて検討した用例は、初唐に見えるものを主とし、孟浩然の當該詩までの變遷を見ていった。よって、盛唐以後の用例について、検討が必要と考えるがこれについては今後の課題としたい。

(26) 李雲逸『盧照鄰集校注』一九九八年、中華書局、五八頁。祝尚書『盧照鄰集箋注』（一九九四年、上海古籍出版社、六二頁）では、咸亨二年（六七二）春、作者が新都尉に就いていたときの作とされる。

(27) 祝尚書『盧照鄰集箋注』前掲書、六三頁。なお『玉臺新詠』では「留別妻一首」と題している。

(28) 彭慶生『陳子昂集校注』黃山書社、二〇一五年、二四五頁。また、中尾一成『陳子昂 垂拱二年出征考』（五）でも同年の作とし、詳細に詩の内容を検討している。『千里山文學論集』第七二號、關西大學大學院文學研究科、二〇〇四年、九四一―一〇〇頁。

(29) 中尾一成『陳子昂 垂拱二年出征考』（十五）『千里山文學論集』第八二號、關西大學大學院文學研究科、二〇〇九年、十一頁。

(30) 彭慶生『陳子昂集校注』前掲書、二四六頁。張相『詩詞曲語辭匯釋』（下）（一九六三年、中華書局、四二二頁）に「坐猶徒也空也枉也」とある。なお彭氏は張相『詩詞曲語辭匯釋』と記しているが、「詞」を「辭」に記した。

(31) 彭慶生『陳子昂集校注』前掲書、三七四頁。氏はこの詩の制作時期を天授元年（六九〇）前後の作としている。張相『詩詞曲

語辭匯釋』(下)(前掲書、四一一頁)に「坐猶徒也空也枉也」とある。なお「惟」は彭慶生『陳子昂集校注』では「唯」になっている。また同書では「禺山金碧路」を、「蜀山金碧地」としている。

(32) 拙論「孟浩然「臨洞庭上張丞相」詩―従來の解釋について―」、前掲論文。

(33) 川台康三『新編中國名詩選』中、前掲書、一一〇頁。